

# つるぎ町一字の民家

民家班（日本建築学会四国支部徳島支所）

石井 舞子<sup>\*1</sup> 小田麻梨乃<sup>\*1</sup> 鎌倉 和敏<sup>\*2</sup> 喜多 順三<sup>\*3</sup> 桑田 誠二<sup>\*4</sup> 佐藤 弘美<sup>\*5</sup>  
 高田 哲生<sup>\*6</sup> 高浜 豊<sup>\*7</sup> 谷中 俊裕<sup>\*8</sup> 田村 栄二<sup>\*9</sup> 那須 幸男<sup>\*10</sup> 林 茂樹<sup>\*11</sup>  
 姫野 信明<sup>\*12</sup> 福田 頼人<sup>\*13</sup>

**要旨：**つるぎ町一字において、総数で190棟の茅葺き民家（主屋）を確認した。現存する茅葺き民家の間取については県内山間部民家の特徴とされる中ネマ三間取よりも横二間取が多く存在することがわかった。架構については剣山周辺地域の民家で用いられているコキ柱・オトシコミの構法が広く用いられていることや、東祖谷や木屋平で古い年代指標とされる柱割りである、五尺間も広く用いられていることなどが明らかになった。

**キーワード：**コキ柱 五尺間 前便所 ひしゃぎ竹 マエガタメ

## 1. はじめに

つるぎ町一字は剣山の北斜面に位置し、貞光川の上流一字川の流域に広がる急峻な山岳地域である。標高はおよそ240メートルから1,000メートルにわたり、急峻な斜面にへばりつくように集落が点在している（図1）。気候は山岳地域に位置するため気象の変化も激しく、冬は県内平野部に比べ積雪量も多く厳しい環境である。このような厳しい自然条件である一字にはどのような民家が存在しているのだろうか。

## 2. 目的

一字にどのような特色を持つ民家があるのか、またその民家がどのように変遷してきたのかを明らかにするために調査を行うこととした。また、これまで調査してきた他の剣山周辺地域である東祖谷、木屋平、木沢などの民家と比べてどのような違いや類似性があるのか、先行研究も参考にしながら把握したいと考えた。

## 3. 調査方法

これまで周辺地域の東祖谷や木屋平で行ってきた調査と同様にその地域の特色を色濃く持つであろう茅葺き民家を調査対象とした。一字村全体を概観するため平成22年7月30日から4班に分かれ、一次調査として外観調査と簡単な聞き取り調査を住宅地区といえ おおよこに基づき悉皆的に実施した。十家や大横など車道の



図1 赤松集落の遠景

\*1 徳島大学工学部建設工学科 \*2 鎌倉建築設計事務所 \*3 空間計画研究所 \*4 (有)桑田建設 \*5 徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部 \*6 高田建築設計  
 \*7 (有)高浜建設 \*8 阿南高専 \*9 穴吹カレッジ \*10 那須建築工房 \*11 株林建築事務所 \*12 徳島市鮎喰町 \*13 くすの木建築研究所

通じていない集落もいくつかあり、それらすべての集落を調査することはできなかったが、できる限り茅葺民家の全体像を掴むことに努めた。そして協力を得られた、4軒の民家については詳細な調査を実施し、実測図の作成や写真による記録を行った。

#### 4. つるぎ町一宇の民家の概要

今回の調査では総数で190棟の茅葺き民家（主屋）

を確認することができた。その位置図を図2に、一次調査データを表1に示す。ただし、そのうちの22棟は先行研究による調査データであり、表1の備考欄に先行調査民家と明記してある。

また、本調査における詳細調査民家は図1に番号で示すとともに、表1の備考欄に詳細調査民家と明記している。以下、調査データに基づきつるぎ町一宇の茅葺き民家の特徴について述べることとする。

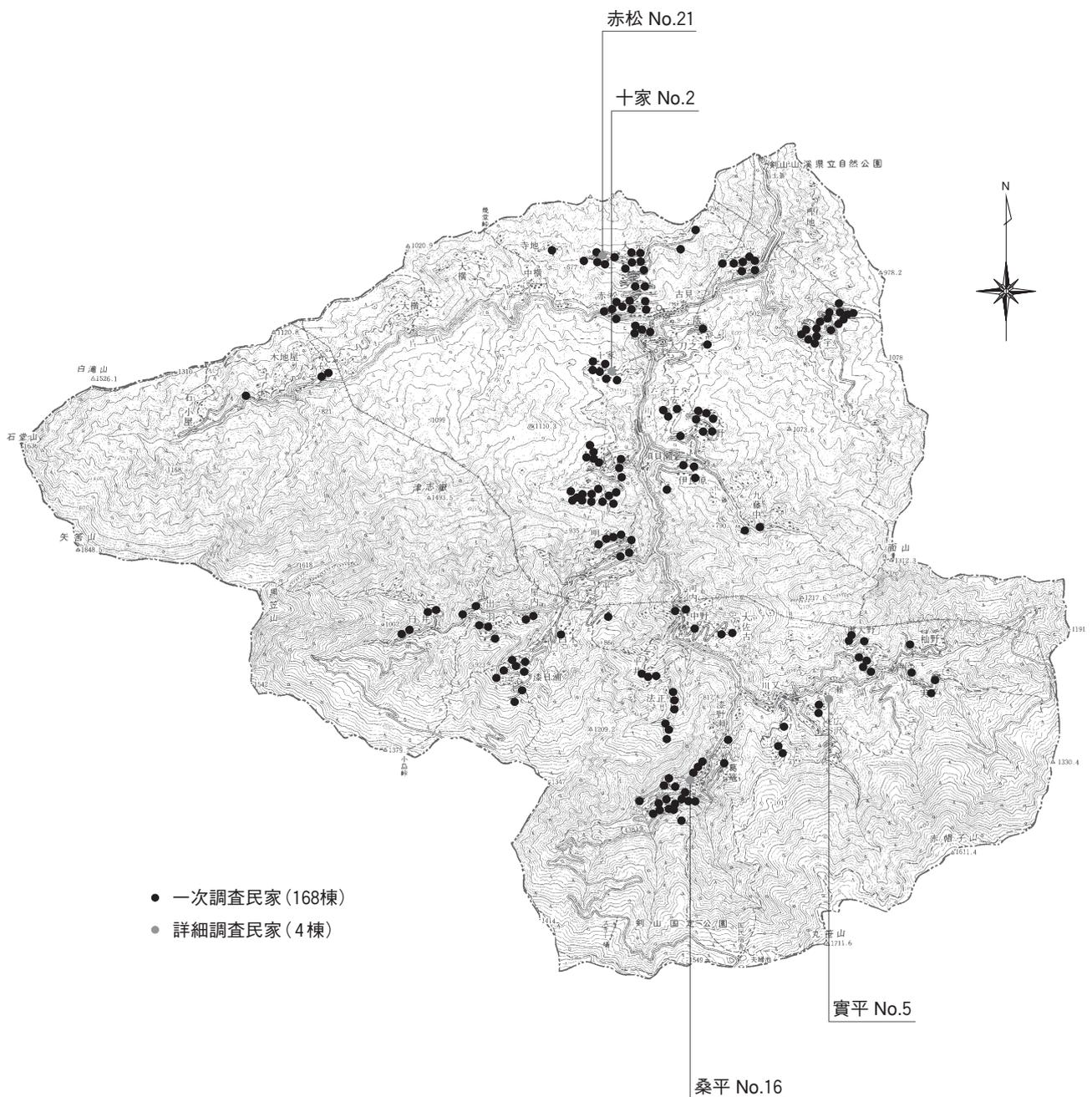


図2 調査民家位置図

表1 つるぎ町一宇村の茅葺き民家 調査データ 一覧表(1)

所在地	No.	屋根	下屋	外形寸法		勝手	玄関	間取	方位	敷地	建築時期	利用形態	ネマ入口	オモテ寸法		コキ柱	内法寸法	五尺間	備考
				間口	奥行									間口	奥行				
赤松	1	トタン	四方	8.5	4.5	左	有	六間取	南	南	100年以上前	居住	引き違い	2	2	—	1730	無	昭和46年頃トタン巻く 内法差し
赤松	2	トタン	葺下	6.5	4.0	右	無	喰違四間取	南	南	約100年前	居住	—	—	—	—	—	—	焼普請 昭和55年頃にトタンを巻く
赤松	3	トタン	四方	5.3	3.0	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
赤松	4	瓦	四方	6.5	4.0	右	無	横二間取	南	南	文化6年	居住	—	2.5	3	有	1750	桁梁	先行調査民家
赤松	5	トタン	四方	6.5	4.0	左	無	喰違四間取	南	南	100年以上前	居住	引き違い	2	2	無	1730	無	茅場は個人で所有
赤松	6	トタン	葺下	—	—	右	無	—	東	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	
赤松	7	トタン	四方	6.5	4.0	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	
赤松	8	トタン	葺下	7.0	4.0	左	無	喰違四間取	南	南	—	居住	—	2	2	—	1730	—	前便所
赤松	9	トタン	四方	5.5	3.0	右	無	中ネマ三間取	南	南東	—	空家	3本引	2	3	—	1725	—	前便所
赤松	10	トタン	四方	7.0	3.5	左	無	—	南	南	100年以上前	居住	—	—	—	—	—	—	昭和45年頃トタンを巻く
赤松	11	トタン	四方	5.5	3.5	左	無	—	南	南西	—	居住	—	—	—	—	—	—	
赤松	12	ルート	四方	7.5	5.0	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	
赤松	13	トタン	三方	5.5	2.5	右	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1730	—	ひしゃぎ竹
赤松	14	トタン	四方	6.5	3.5	左	無	喰違四間取	南	南西	約100年前	居住	引き違い	2	2	有	1730	無	茅場は個人で所有
赤松	15	トタン	葺下	6.5	4.5	左	無	—	南	南	5代前	居住	—	—	—	—	—	—	元庄屋
赤松	16	茅	葺下	6.5	—	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	前便所
赤松	17	トタン	葺下	6.5	2.5	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	セガイ
赤松	18	トタン	—	6.0	4.0	右	無	喰違四間取	南	南	大正初	居住	—	2	2	—	—	—	ホンマの柱には葉は使わない
赤松	19	トタン	葺下	7.0	3.5	右	無	—	南	南東	—	空家	—	—	—	有	—	—	
赤松	20	トタン	三方	7.5	—	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	1730	—	
赤松	21	トタン	葺下	6.5	3.5	左	無	喰違四間取	南	南	明治31年	空家	3本引	2	2	有	1730	無	詳細調査民家*1
赤松	22	トタン	四方	7.5	4.5	左	無	—	南	南東	—	空家	—	—	—	—	—	—	
赤松	23	トタン	葺下	6.0	3.5	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	天井:土無
赤松	24	トタン	四方	5.5	4.5	左	無	中ネマ三間取	南	南	明治22年	居住	3本引	2	3	有	1730	無	先行調査対象民家
赤松	25	小屋下	—	6.0	3.5	左	無	横二間取	南	南	天明6年	空家	—	2.5	3	有	1730	桁梁	先行調査対象民家
出羽	1	トタン	四方	7.0	3.0	右	無	横二間取	北	北	—	居住	—	3	2	有	1750	桁梁	元ひしゃぎ竹(大壁) 隠居屋有
出羽	2	トタン	葺下	7.5	3.5	左	無	横二間取	北	北	—	居住	—	3	2.5	—	1770	桁梁	
出羽	3	トタン	四方	8.0	4.0	右	有	三間取	北	北	大正8年	居住	—	3	3	—	—	—	無
出羽	4	トタン	四方	7.5	3.5	右	無	横二間取	北	北	18C前半	空家	—	3	2.5	無	1740	梁	先行調査対象民家
出羽	5	小屋下	—	7.5	3.5	右	無	中ネマ三間取	北	北	安政3年	空家	引き違い	3	3	有	1710	無	先行調査対象民家
一宇	1	トタン	三方	6.0	3.0	左	無	横二間取	南	南	大正初	居住	—	2	2.5	有	1715	無	昭和30年頃に改造
一宇	2	トタン	三方	5.0	—	—	無	—	南	南	—	空家	—	2	2	—	—	—	—
一宇	3	トタン	四方	6.5	3.0	—	有	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1720	—	—
一宇	4	トタン	三方	5.5	3.0	左	無	一間取	南	南	—	居住	—	2	2	—	—	—	サブロク
一宇	5	トタン	四方	6.0	3.0	—	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1725	—	—
一宇	6	トタン	四方	5.5	3.0	左	無	中ネマ三間取	南	南	—	空家	3本引	2.5	2.5	—	1730	桁	—
一宇	7	トタン	三方	5.3	—	右	無	—	南	南東	—	居住	—	—	—	—	1720	—	—
伊良原	1	トタン	四方	8.0	3.5	右	無	—	北	—	約100年前	居住	—	2.5	3	有	1736	梁	—
伊良原	2	トタン	三方	7.0	3.5	右	無	—	西	—	約200年前	居住	—	3	2.5	有	—	—	屋根葺材:山茅 土壁(大壁)
伊良原	3	トタン	四方	7.0	3.0	右	無	—	北	—	—	居住	—	—	—	—	—	—	—
伊良原	4	トタン	四方	6.5	3.5	左	無	中ネマ三間取	—	—	18C中	空家	無	2.5	2.5	無	1730	桁梁	先行調査対象民家
臼木	1	トタン	四方	8.0	3.0	右	後補	横二間取	北	北西	—	居住	—	2.5	2.5	有	1760	桁梁	元前便所 蔵有
臼木	2	トタン	四方	6.5	3.0	右	無	横二間取	北	北	—	居住	—	2.5	2.5	—	1700	桁梁	—
臼木	3	トタン	四方	7.5	4.0	右	無	横二間取	北	北東	—	空家	—	2	4	—	1820	無	—
漆日浦	1	トタン	葺下	6.5	3.5	右	後補	横二間取	北	北	明治初?	居住	—	3	3	有 多数	—	—	柱:5寸角 煙草乾燥小屋有
漆日浦	2	トタン	三方	7.3	3.5	右	無	中ネマ三間取	北	北	—	居住	—	3	3	—	1790	—	—
漆日浦	3	トタン	四方	6.5	3.5	—	後補	—	北	北東	—	居住	—	—	—	—	1800	—	屋号「ヤマ上 當月」
漆日浦	4	トタン	三方	7.5	3.5	右	無	横二間取	北	北	昭和10年	居住	—	2.5	3	—	—	—	—
漆日浦	5	茅	葺下	7.0	3.0	左	無	横二間取	北	北東	—	空家	—	2.5	3	有	1725	無	—
漆日浦	6	茅	葺下	6.75	3.0	右	無	横二間取	北	北	—	空家	—	2	3	有	1780	—	外壁:杉皮
大野	1	茅	四方	7.0	4.0	右	有	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	—
大野	2	トタン	四方	7.0	4.0	—	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	1740	—	—
大野	3	トタン	葺下	6.5	3.5	左	無	横二間取	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	前便所 妻(大壁)
大野	4	トタン	四方	4.5	2.5	—	無	—	西	西	—	空家	—	—	—	—	—	—	土間無
大野	5	トタン	三方	7.5	4.0	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	前便所(東端)
大野	6	ルート	四方	6.0	3.5	左	無	一間取	南	南	約100年前	居住	—	2.5	3	—	—	—	前便所(東端)
大横	7	茅	四方	6.5	3.0	左	無	—	南	南	—	廃屋	—	—	—	—	—	—	—
奥大野	1	トタン	四方	7.5	4.5	左	無	横二間取	南	—	約250年前	居住	—	—	—	有	1730	梁	屋根葺材:山茅
奥大野	2	小屋下	—	9.5	4.0	右	無	—	—	—	享保9年	—	—	3	3	無	1730	無	先行調査民家
薩	1	トタン	四方	6.5	3.5	左	無	—	北	北	約90年前	居住	—	—	—	—	—	—	隠居制度有 昔は阿波葉の生産
薩	2	トタン	二方	6.5	3.5	右	無	—	北	北東	—	居住	—	—	—	—	—	—	—
河内	1	トタン	葺下	7.0	4.0	左	無	—	西	—	—	居住	—	—	—	—	1750	—	—
河内	2	茅	三方	4.0	3.0	—	無	—	東	—	—	空家	—	—	—	—	—	—	2階建

表1 つるぎ町一宇村の茅葺き民家 調査データ 一覧表 (2)

所在地	No.	屋根	下屋	外形寸法		勝手	玄関	間取	方位	敷地	建築時期	利用形態	ネマ入口	オモテ寸法		コキ柱	内法寸法	五尺間	備考
				間口	奥行									間口	奥行				
川又	1	トタン	四方	6.0	3.0	左	無	—	—	—	—	空家	—	—	—	1730	—		
川又	2	トタン	一方	4.5	3.0	—	無	—	西	—	100年以上前	居住	—	2.5	2.5	無	1735	梁	屋根葺材:山茅
川又	3	トタン	三方	7.5	3.5	右	無	—	南東	—	—	居住	—	—	—	1730	—		
川又	4	トタン	三方	6.0	4.0	左	無	—	東	—	200年前	居住	—	—	—	無	1730	梁	屋根葺材:山茅
川又	5	トタン	三方	7.0	—	—	—	—	南	—	—	空家	—	—	—	—	—	—	
川又	6	トタン	葦下	—	—	—	—	—	—	—	—	空家	—	—	—	—	—	—	
川又	7	トタン	四方	7.0	—	右	無	—	南	—	—	居住	—	—	—	—	1735	—	
木地屋	1	トタン	四方	6.0	4.0	右	無	喰違四間取	南西	南西	約100年前	空家	引き違い	2	2	有	1730	無	梁材:「ハリノキ」
木地屋	2	トタン	四方	5.5	4.0	左	無	一間取	南	南	約100年前	居住	—	2	3	有	1725	無	元葦下
木地屋	3	トタン	四方	6.5	3.0	左	無	—	南東	南東	—	空家	—	—	—	—	—	—	
木地屋	4	茅	—	7.0	4.0	左	無	中ネマ三間取	—	—	安永10年	移転	無	3	3.5	有	1730	無	先行調査民家、四国村へ解体移転予定
剪宇	1	トタン	四方	6.0	3.5	右	無	横二間取	南	南	安永3年	居住	—	2.5	3	無	1730	桁梁	先行調査民家 柱:栗
剪宇	2	トタン	—	—	—	—	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	無	
剪宇	3	トタン	四方	4.0	3.0	右	無	—	南	南	—	—	—	—	—	—	—	無	
剪宇	4	トタン	葦下	4.5	3.0	左	無	一間取	南	南	—	居住	—	2.5	2.5	—	1710	無	茅場カセン 150㎡(茅をくくる針金)
剪宇	5	トタン	一方	5.0	3.0	右	無	横二間取	南東	南東	—	居住	—	2.5	2.5	有	—	無	
剪宇	6	トタン	三方	7.0	3.5	左	無	—	南東	南東	—	居住	—	—	—	—	—	無	長屋門有
剪宇	7	トタン	—	4.0	2.5	—	無	横二間取	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	無	移築
剪宇	8	トタン	四方	7.0	3.5	左	無	六間取	南	南	—	居住	—	2.5	2	—	—	無	
剪宇	9	茅	葦下	6.0	3.5	右	無	—	南	南	—	居住	—	2.5	3	—	1750	無	昭和17年に茅替
剪宇	10	トタン	四方	4.5	3.0	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	無	
剪宇	11	トタン	四方	6.0	3.0	右	無	—	南	南	—	—	—	—	—	—	—	無	
剪宇	12	トタン	四方	—	—	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	無	
剪宇	13	トタン	四方	6.0	3.0	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	無	
剪宇	14	茅	四方	5.5	3.0	右	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	無	ひしゃぎ竹
剪宇	15	スレート	四方	—	—	右	無	—	南	南	—	—	—	2	2	—	—	無	平成13年にスレート葺に
剪宇	16	茅	四方	4.0	3.0	—	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
切越	1	トタン	二方	5.8	3.0	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1740	—	
切越	2	トタン	四方	6.0	3.0	左	無	一間取	南	南	—	居住	—	2.5	2.5	有	1730	無	天井:土無
切越	3	トタン	葦下	4.5	3.5	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	
切越	4	トタン	四方	7.5	4.0	右	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	
九藤中	1	トタン	四方	7.0	3.5	右	無	三間取	南	—	—	空家	—	3	3	—	1740	無	前便所 昭和58年にトタン巻く
九藤中	2	トタン	四方	7.0	3.5	左	無	—	北	北	—	空家	—	3	3	—	—	無	
桑平	1	トタン	四方	10.0	4.0	右	無	横二間取	北	北	—	空家	—	2.5	3.5	—	1723	桁	
桑平	2	トタン	二方	—	—	—	—	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	3	トタン	三方	—	—	右	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	4	トタン	葦下	—	—	無	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	土間無
桑平	5	トタン	四方	4.0	3.0	左	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	6	トタン	四方	7.0	3.0	無	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	土間無
桑平	7	トタン	三方	6.25	3.0	右	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	前便所
桑平	8	トタン	四方	7.0	2.0	左	無	—	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	
桑平	9	トタン	四方	7.0	—	左	無	—	北東	北	—	居住	—	—	—	—	—	—	
桑平	10	トタン	四方	7.5	3.5	右	無	横二間取	西	北	150年前	居住	—	2.5	3	—	1715	梁	前便所 昭和35年頃オボタを付ける
桑平	11	トタン	四方	9.5	4.5	左	有	三間取	北	北	100年以上前	居住	—	—	—	—	1735(1715)	—	
桑平	12	トタン	二方	6.5	3.5	左	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	13	トタン	四方	7.0	—	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	14	トタン	四方	7.0	—	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	15	トタン	四方	7.0	—	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	16	トタン	三方	7.5	3.5	左	無	横二間取	南	南	—	居住	—	3.0	3.0	6	—	梁	詳細調査民家、前便所
桑平	17	トタン	三方	7.5	4.0	左	有	中ネマ三間取	南	南	宝永元年	居住	引き違い	2.5	3	無	1750	梁	先行調査民家
桑平	18	トタン	三方	6.5	—	右	有	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
桑平	19	トタン	三方	5.5	3.5	無	無	—	南東	南東	—	空家	—	—	—	—	—	—	土間無 前便所(端)
桑平	20	トタン	—	—	—	—	—	—	南東	南東	—	空家	—	—	—	—	—	—	
子安	1	トタン	一方	6.5	3.5	左	無	横二間取	南	南	—	居住	無	3	3	無	1735	無	
子安	2	トタン	葦下	6.0	3.5	左	無	三間取	南西	南西	明治時代	空家	—	2	2	有	1730	無	先行調査民家
子安	3	トタン	四方	6.75	4.0	左	無	—	南西	南西	—	空家	—	—	—	—	1735	—	切妻
子安	4	茅	四方	6.5	3.5	左	無	横二間取	—	—	文政6年	—	—	2.5	3	無	1760	梁	先行調査民家
實平	1	トタン	四方	8.0	4.0	左	無	—	西	—	—	空家	—	—	—	—	1735	—	前便所
實平	2	トタン	四方	8.0	4.0	左	有	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1735	無	
實平	3	トタン	四方	6.0	3.5	左	無	—	北	—	100年以上前	居住	—	2	3.5	無	1730	無	前便所 屋根葺材:山茅+麦藁
實平	4	トタン	三方	6.5	4.0	左	無	—	南	—	—	居住	—	—	—	—	—	—	
實平	5	トタン	一方	9.0	5.0	左	有	—	北西	西	明治15年	居住	—	3	3	有	1750	無	詳細調査民家 屋根葺材:山茅
實平	1	トタン	一方	5.0	4.0	左	無	横二間取	南西	—	100年前	居住	—	—	—	有	1740	—	前便所

表1 つるぎ町一宇村の茅葺き民家 調査データ 一覧表 (3)

所在地	No.	屋根	下屋	外形寸法		勝手	玄関	間取	方位	敷地	建築時期	利用形態	ネマ入口	オモ子寸法		コキ柱	内法寸法	五尺間	備考
				間口	奥行									間口	奥行				
白井	1	トタン	葺下	5.5	6	右	無	—	南東	南東	—	空家	—	—	—	—	—		
白井	2	トタン	四方	5.5	3.0	無	無	横二間取	南西	南西	戦後	空家	—	3	3	—	1730	無	
白井	3	トタン	三方	6.5	3.5	左	無	横二間取	南	南	大正3年頃	居住	—	3	3	—	1730	梁	天井:竹簧の子
白井	4	トタン	三方	6.5	3.5	左	無	中ネマ三間取	南	南	大正初	空家	引き違い	2.5	3	有	—	梁	
白井	5	トタン	三方	4.0	3.0	左	無	一間取	北東	北東	—	空家	—	2.5	3	—	1750	—	
白井	6	トタン	四方	7.5	4.0	左	無	横二間取	南東	南東	—	空家	—	2.5	3.5	有	1745	無	前便所
白井	7	トタン	四方	7.0	3.5	左	無	中ネマ三間取	—	—	宝暦6年	空家	無	2.5	2.5	無	1740	桁梁	先行調査民家
平	1	トタン	三方	6.0	3.5	左	無	横二間取	西	西	文政13年	居住	—	2.5	3	有	1750	梁	先行調査民家 昭和30年頃トタン巻く
葛籠	1	トタン	三方	9.0	3.5	左	有	三間取	西	西	—	居住	—	2.5	2.5	—	1760	梁	平成2年にトタン巻く オクノマに囲炉裏
葛籠	2	トタン	一方	10.0	4.0	右	有	—	北西	北西	18C前半	空家	—	2.5	3	無	—	梁	先行調査民家
葛籠	3	小屋下	—	7.0	3.5	右	無	中ネマ三間取	—	—	享保5年	—	建具無	2.5	2.5	無	1730	桁梁	先行調査民家
寺地	1	トタン	四方	—	—	—	—	—	南	南	—	廃屋	—	—	—	—	—	—	
十家	1	トタン	三方	5.5	3.0	右	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1780	—	
十家	2	トタン	四方	6.5	3.5	左	無	横二間取	南	南	—	居住	—	2.5	3	無	1720	桁梁	詳細調査民家 長押立て 移築
十家	3	トタン	二方	6.5	3.5	無	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1,830	—	
十家	4	トタン	二方	6.0	3.0	右	無	—	南	南	—	空家	—	2.5	2.5	—	1730	—	
十家	5	トタン	四方	6.5	3.0	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1730	—	
十家	6	茅	葺下	4.0	2.5	右	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	—	—	
中野	1	トタン	四方	6.0	4.0	右	無	—	北西	—	78年前	居住	—	—	—	無	1780	—	屋根葺材:山茅
中野	2	トタン	四方	6.0	3.5	無	—	—	北西	—	—	—	—	—	—	—	1750	—	
中野	3	トタン	一方	4.5	3.0	右	無	—	北	—	—	居住	—	—	—	—	1730	—	屋根葺材:山茅
久敷	1	トタン	二方	4.0	3.0	右	無	—	南東	—	—	空家	—	—	—	—	1800	—	
久敷	2	トタン	二方	6.0	3.0	右	無	横二間取	南	南	—	居住	—	2	2	—	1750	—	
久敷	3	トタン	三方	6.5	4.0	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1770	—	
久敷	4	トタン	三方	7.0	3.5	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1740	—	前便所 ひしやぎ竹
久敷	5	トタン	葺下	5.5	3.5	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1740	—	前便所
久敷	6	トタン	葺下	7.5	4.0	左	無	喰違四間取	南東	南	約150年前	居住	—	—	—	無	1740	無	
久敷	7	トタン	四方	6.0	4.0	右	無	—	北	北	—	居住	—	—	—	—	—	—	
久敷	8	トタン	四方	7.0	3.5	右	有	横二間取	北	北	約150年前	居住	—	3	3	—	1720	—	前便所 屋根葺材:山茅
久敷	9	トタン	四方	6.0	3.5	右	無	三間取	北	北	—	居住	—	2.5	3	無	—	無	前便所 屋根葺材:山茅
久敷	10	トタン	三方	7.0	3.5	右	無	三間取	北	北	約150年前	居住	—	2.5	2.5	有	1740	有	前便所 屋根葺材:山茅
久敷	11	トタン	三方	6.5	3.5	右	無	横二間取	北	北	約200年前	居住	—	2.5	3	—	1750	—	前便所 屋根葺材:山茅
久敷	12	トタン	三方	6.5	3.5	右	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	1720	—	
久敷	13	トタン	二方	7.5	4.0	左	無	—	北	北	—	居住	—	—	—	—	1750	—	
久敷	14	トタン	葺下	7.5	4.0	右	無	四間取	東	東	明治20年	空家	—	3	3	有	1730	無	先行調査民家 前便所
久敷	15	トタン	葺下	11.0	4.0	左	無	五間取	東	東	寛政元年	居住	—	3	3	無	1740	無	先行調査民家 屋根葺材:山茅
久敷	16	トタン	—	7.0	3.5	左	無	横二間取	東	東	約130年前	居住	—	2.5	3	—	1720	有	屋根葺材:山茅
久敷	17	トタン	—	6.5	3.5	右	無	—	東	東	—	空家	—	—	—	—	1730	—	
久敷	18	トタン	—	6.5	3.5	左	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1720	—	前便所
久敷	19	トタン	—	5.0	3.5	右	無	—	南	南	—	空家	—	—	—	—	1730	—	
久敷	20	小屋下	—	8.0	4.0	右	無	中ネマ三間取	—	—	宝暦3年	—	引き違い	3	3	有	1760	無	先行調査対象民家
平井	1	トタン	三方	5.5	—	左	無	—	東	東	—	空家	—	—	—	—	—	無	
平井	2	トタン	葺下	5.0	—	左	無	—	東	東	—	空家	—	—	—	—	—	無	
平井	3	トタン	葺下	7.0	—	左	無	—	東	東	—	空家	—	—	—	—	—	無	
平井	4	トタン	一方	5.5	—	左	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	無	
平井	5	トタン	四方	6.0	3.5	左	無	—	北東	北東	—	空家	—	—	—	—	—	無	
平井	6	トタン	葺下	7.0	4.0	右	無	—	北東	北東	—	空家	—	—	—	—	—	無	
平井	7	トタン	四方	7.0	3.5	右	無	横二間取	—	—	享保10年	—	—	3	2.5	無	1720	梁	先行調査民家
平井	8	トタン	四方	6.0	3.5	左	無	横二間取	—	—	寛政8年	—	—	2	3	有	1720	梁	先行調査民家
平井	9	茅	—	5.5	3.5	左	無	一間取	—	—	明治末	—	—	3	3	有	—	梁	先行調査民家
廣澤	1	トタン	三方	5.5	3.5	右	無	横二間取	西	西	—	居住	—	2	3	—	—	無	昭和24・5年に移築 外壁:杉板(真壁)
廣澤	2	トタン	四方	7.5	4.0	左	無	横二間取	東	東	天保年間	居住	—	3	3	—	—	梁	オクタ後付
廣澤	3	トタン	葺下	7.0	3.0	左	無	—	北東	—	150~200年前	居住	—	—	—	無	1800	—	屋根葺材:山茅
法正	1	茅	四方	6.5	3.5	右	無	横二間取	北	北	—	居住	—	—	—	—	—	無	
法正	2	トタン	四方	6.5	3.5	左	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	無	
法正	3	トタン	四方	5.0	3.0	無	無	—	北	北	—	空家	—	—	—	—	—	無	
明谷	1	トタン	四方	7.0	3.5	右	無	—	南	—	約100年前	居住	—	—	—	有	1725	桁	屋根葺材:山茅
明谷	2	トタン	葺下	6.0	3.5	右	無	—	南	—	—	空家	—	2.5	3	—	1730	桁梁	
明谷	3	トタン	四方	6.5	3.5	右	無	—	南	—	約150年前	居住	—	2.5	3	無	1750	桁梁	屋根葺材:山茅
明谷	4	トタン	四方	6.5	3.5	—	無	—	南	—	—	居住	—	—	—	—	—	—	
明谷	5	トタン	二方	6.0	3.5	左	無	—	南	—	約300年前	居住	—	—	—	—	—	—	
明谷	6	トタン	四方	7.0	3.5	右	無	—	南	—	約100年前	居住	—	—	—	有	1720	—	屋根葺材:山茅 セガイ
明谷	7	トタン	四方	6.5	3.5	左	無	—	南	—	150年前	居住	—	2	3.5	—	—	—	
明谷	8	トタン	葺下	4.0	2.0	—	無	横二間取	南	南	—	居住	—	—	—	—	—	—	納屋

### 1) 敷地

急峻な地形に集落が点在する一宇では、それぞれの敷地は斜面を切り盛りし、谷側に石垣を積み等高線に沿うように細長く造成している。奥行きが狭いため、谷側に丸太組の上に土を置いた地盤（ヤマト）を作っている場合もある。また、敷地の谷側に穀物の乾燥のために腐りにくい栗の木などを用いたハデを設けている民家も多い（図3）。

### 2) 建物配置

細長い敷地に主屋、納屋、隠居屋、離れなどの付属屋が一行に並ぶ。納屋は屋敷地の一段下から建てられた2層のものが多く、下階は牛屋として使われていた。また、斜面を利用して3層構造としているものもある



図3 穀物を干すためのハデ

（図4）。蔵を持つ民家は少数であった。

主屋は南斜面の場合は南に、北斜面の場合は北に開いている。勾配の緩い北斜面などの場合、日当たりに配慮し山側に開く例もあるが、一宇においては急峻な地形のため基本的に谷側を開いて山側を閉じる造りとなっている。



図4 3層の納屋

### 3) 屋根

屋根葺き材については、ほとんどが山茅との聞き取りであったが、『四国の民家と集落 一宇村』では麦わらや杉皮、そぎなどで葺かれた民家もあったと記されている。また、中央地区（久日、久藪、須貝瀬、伊良原、九藤中、大野）では、屋根葺き材料の調査が、昭和10年と昭和51年に行われている。昭和10年では茅葺が73%、トタン葺が4.7%、昭和51年では茅葺が41.5%、トタン葺が48.3%とある。今回の調査では、調査地区は異なるが、約88%がトタンで巻かれていることがわかった（図5）。また、赤松地区では茅場は個人所有だったとの聞き取りが得られた。

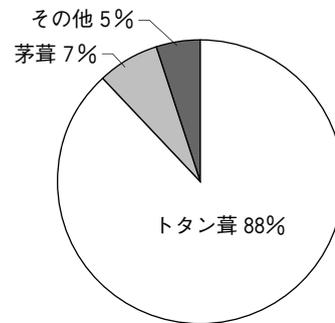


図5 屋根仕上げ材の割合

### 4) 外壁

外壁については剣山周辺部の特徴とされる、ひしゃぎ竹が用いられている。先行研究において「壁は土壁で大壁」とあるが、今回の調査では大壁と真壁の両方を確認することができた（図6, 7）。比較的新しい時代のものは真壁で、ひしゃぎ竹押さえとしているようである。



図6 大壁でひしゃぎ竹押さえ



図7 真壁でひしやぎ竹押さえ

5) 建物規模

間口は5.5間から7.5間、奥行は3間から4間のものが多く分布している(図8, 9)。また、周辺地域同様、一字でもサスを組んでいる上屋部分が梁間3間、桁行6間の大きさのことを「サブロク」と呼び、建物規模の目安とされていることが聞き取りにより確認できた。

6) 間取り

空家の場合や調査時に家人が留守の場合は、間取りを確認することができなかったが、先行調査民家22棟と本調査民家を合わせた全体の3割程度である77棟の間取りについて確認することができた(図10)。横二間取がそのうちの半分ほどを占めている。図11に間取りの模式図を示す。ニワのすぐ上手に2.5間から3間角ほどの広いオモテがあり、その上手にトコを備えた客用のザシキがあるものを仮に三間取と呼ぶことにすると、県内山間部の代表的間取である中ネマ三間取とは異なる間取である。『四国の民家と集落 一字村』では全国的には多くみられる広間型の間取とあるが、県内他地域にはあまりみられない間取である。本調査ではこのような間取が7棟確認できたが、もう少し詳しい調査が必要と考えられる。また、片川左岸の木地屋、赤松地区では間口2間のシモ、カミザシキを持つ喰違四間取が多くみられた。先行研究では赤松地区において江戸期の横二間取の民家が確認されていることや、五尺間を採用していないこと、コキ柱・オトシコミの構法を採用していることなどから、この間取は比較的新しい年代の間取と考えられる。

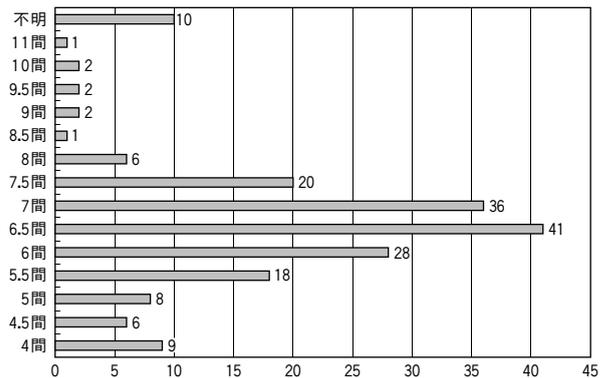


図8 間口の規模

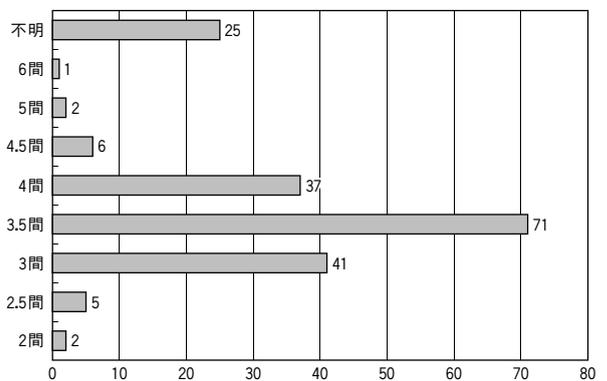


図9 奥行きの規模

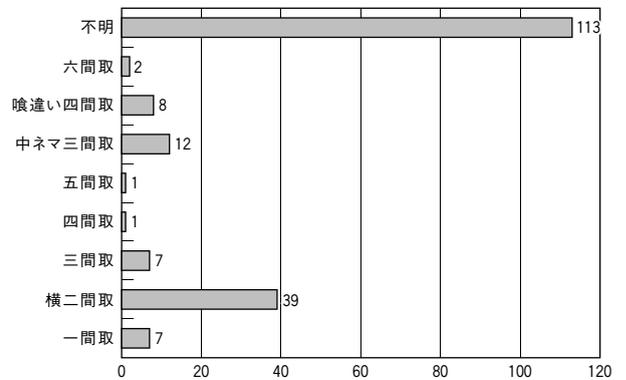


図10 間取

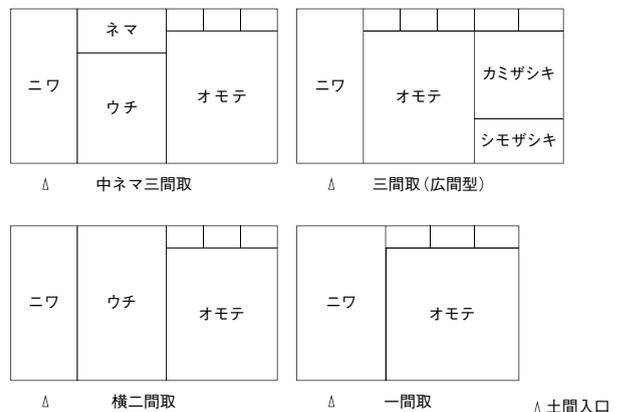


図11 間取りの模式図

### 7) 勝手

全体では左勝手が96棟、右勝手は72棟と左勝手が  
多い（図12）。調査数の比較的多い地区毎でみてみ  
ると、赤松地区では、左勝手が18棟、右勝手が7棟、  
剪字地区では左勝手が6棟、右勝手が7棟、桑平地  
区では、左勝手が10棟、右勝手が5棟、久敷地区で  
は、左勝手が8棟、右勝手が12棟となっており、は  
っきりとした傾向はみられなかった。

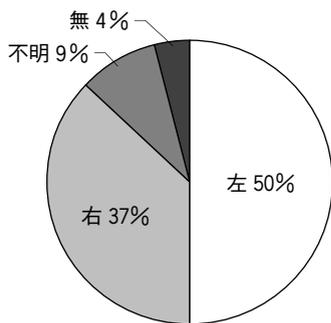


図12 勝手の割合

### 8) 架構

一字の民家の構造形式はサス組を受ける上屋部分  
とその周囲半間ほどの下屋部分から構成される下屋  
造である。聞き取りによると家屋内の上屋部分を  
「ホンマ」といい下屋部分と区別している。この架  
構の特徴としては、入側筋の上屋柱を省略するた  
めに下屋の桁より半間内に入ったほぼ内法高さ  
に「マエガタメ」と呼ばれる太い梁を用いている  
ことである。本調査においても数多く確認できた。

また、東祖谷、半田、木屋平、木沢などの民家  
に用いられているコキ柱・オトシコミの構法を21棟  
について確認することができた（図13）。そのうち棟  
札により年代を確認できたのは明治31年（1898）  
建築の赤松No. 21の民家である。これは柱を内法位  
置から上を細くこき、横架材を落とし込み架構を  
固める構法で、時代としては18世紀中頃から使  
われていることが今までの調査において確認され  
ている。

上屋部分の梁間や桁行において、二間半を三等  
分した柱割りを五尺間と呼び、先行研究では比較  
的古い指標とされている。五尺間について今回確  
認できたのは26棟でそのうち、梁行は13棟、桁  
行は3棟、梁と桁行両方が8棟であったが、本調  
査においては棟札などにより建築年代を確認する  
には至らなかった。



図13 コキ柱・オトシコミの構法

### 9) 前便所

前便所は剣山地周辺地域で見られる興味深い風  
習であるが、本調査においても数多く確認するこ  
うできた（図14）。村史によると、「家の中央縁側  
に水溜めつぼをつくり、湯殿の排水を溜め防火用  
としていたが、後に小便を兼ねるようになった」と  
ある。衛生面と居室への日当たりの問題など、こ  
の位置に便所を設ける理由がわからなかったがこ  
れもひとつの理由なのかもしれない。



図14 前便所

## 5. 詳細調査民家

### 1) 十家 No.2

当家は十家集落の東端に位置する。国道から十家集落までは車道がなく、貞光川沿いの四国電力切越発電所付近から急峻な山道を徒歩で1時間ほど登り、ようやくたどり着く。日当たりのよい南斜面を切り盛りした屋敷地に、東から主屋、納屋が横に並ぶ(図15)。主屋(図16)は間口6間、奥行3.5間。間取りは左勝手横二間取りで、ザシキは梁間桁行とも五尺間で間口二間半、奥行三間である(図17)。

構造形式は貫と長押で架構を固める長押立て(ヌキダチ)である。また、表側の上屋筋の内法から少し上に、マエガタメと呼ばれる太い梁が架り表入側の上屋柱を省略している。屋根の形態は茅葺き屋根であるが茅は下ろされ、小屋裏は野地板が現しとなっている。細い丸太の古いサス組が残されている。上屋の梁間は2間半で棟束は立てない形式である。外壁は土壁で、真壁の上に現在は厚み五分程の板を縦に張り付けて壁土の落ちるのを防いでいるが、古くは、ひしゃぎ竹押えであったと考えられる。子安にあった古家を移築してきたという。

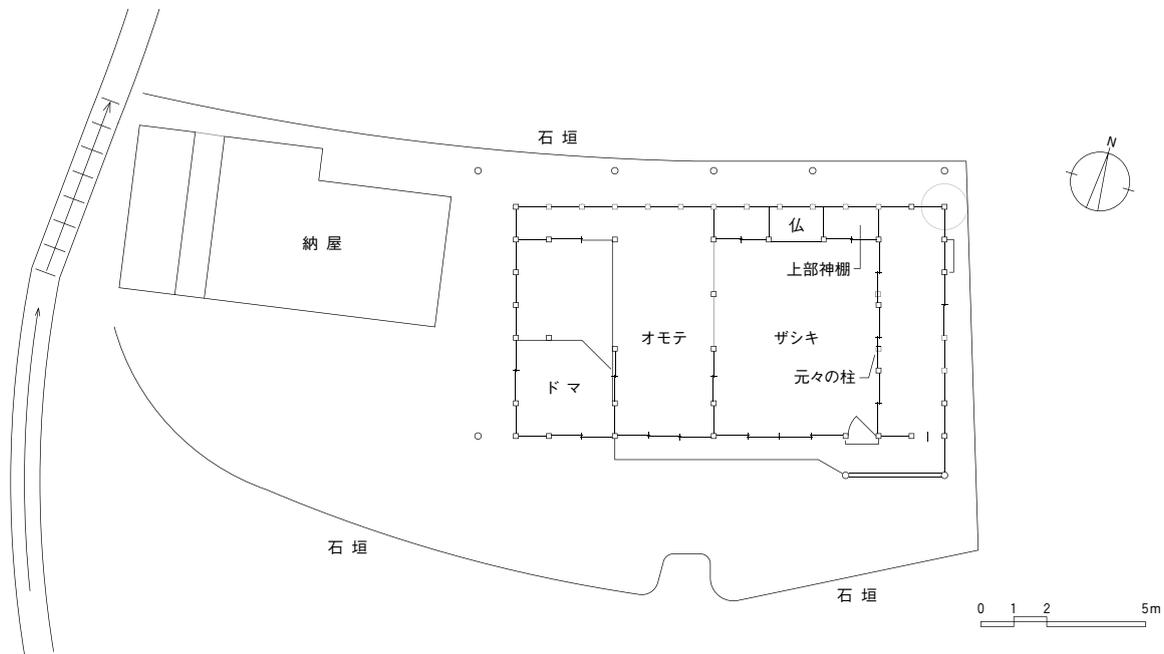


図15 平面・配置図



図16 主屋外観



図17 ザシキ内観

2) 實平 No.5

貞光川に架かる実平橋を渡り、山を少し上がった西斜面に当家は位置する。北西斜面に等高線に沿って造成された屋敷地のほぼ中央に、茅葺きトタン巻きの主屋（図18）が建ち、北側には茅葺きトタン巻きの納屋が建つ。主屋から「2542年牛年2月」と記された棟札が見つかり、紀元2542年、明治15年（1882）の建築と考えられる。間口9間、奥行5間と規模が大きい。間取りは複雑であるが、北側のニワ、ショクドウ、台所や西側の玄関、廊下などは後の増築による。内部の改造は多いが、聞き取りや梁間3間、桁行6.5間の上屋の規模、柱の配置などから、当初は北側に18畳のオモテを有する広間型の間取りであったものと推測される（図19）。昭和29

年の改築の際に正面の下屋を設けるまでは、葺き下ろし屋根で前便所もあったということから、元々は剣山周辺地域の特徴を備えた民家であったことが伺い知れる。

屋根にトタンを巻いたのは昭和47～48年頃とのことで、茅の葺き替えを行っていたころは、周囲の杉林が茅場として維持され、秋に茅刈りを行い、春になると地元の人が10～15人ほど集まり、自力で葺き替え作業をしていたそうである。小屋組は束を用いないサス構造（図20）で、オクザシキには柱の上部をこき、梁を落とし込むコキ柱・オトシコミの構法が見られる（図21）。



図18 主屋外観



図21 コキ柱詳細

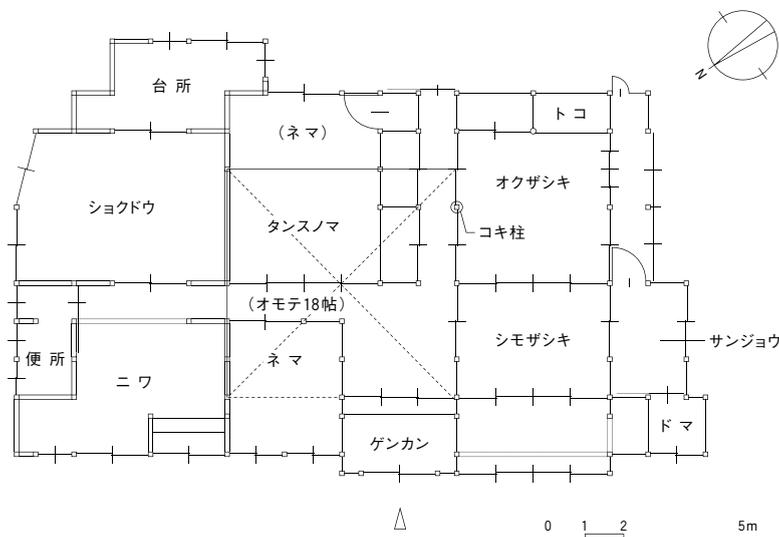


図19 平面図

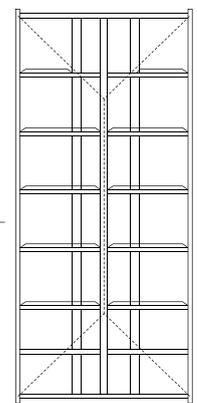
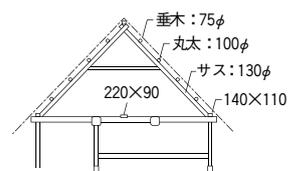


図20 小屋組

### 3) 赤松 No. 21

当家は、赤松集落で標高の最も高いところに位置する。元庄屋で屋号は「カネダイ」。屋敷地南東の一段下がったところに、一字では少数と思われる蔵が、主屋の西に隣接して2階建の離れとその南に別棟のカワヤがある。現在主屋は、納屋として使われている(図22)。建築年は棟札により明治31年と確認できた(図23)。間取は左勝手喰違四間取で上手に接客のためのオクザシキとシモザシキをとっている(図24)。屋根は茅葺き葺き下ろしでトタン巻きで、梁を持ち出し、軒先を支える構造となっている(図25)。上屋梁は梁間二間で丸太のサス組を支え、棟通りにはゴヒラの材ではなく、太い丸太が用いられている(図26)。コキ柱・オトシコミの構法を用いて架構を固め、マエガタメで入側筋の上屋柱を省略している。

土間入口とザシキの間の外部にユドノ(前便所)が残っている。これは東祖谷地方を代表とする剣山周辺地域にみられる形態である。聞き取りによると、主に小便のために使っていたとのことであった。また、外壁は土壁を真壁で納めて荒壁のままである。



図22 主屋外観



図23 棟札

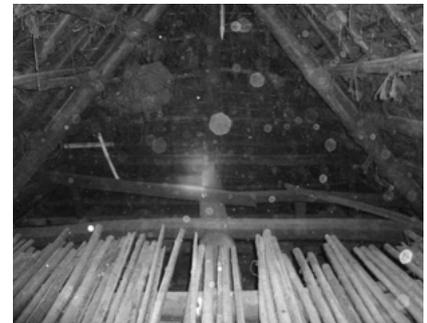


図26 小屋裏状況

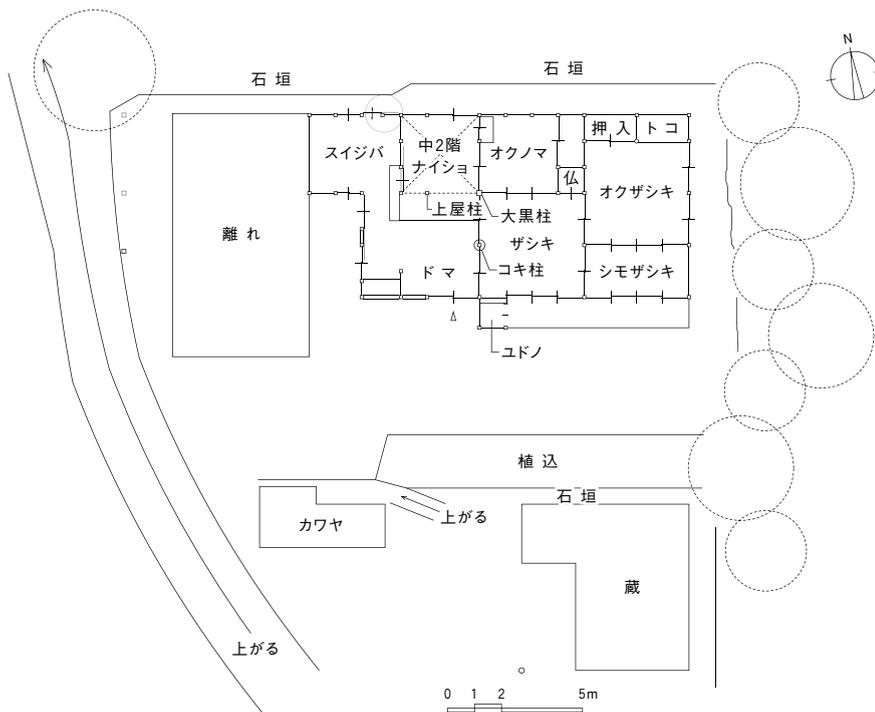


図24 平面配置図

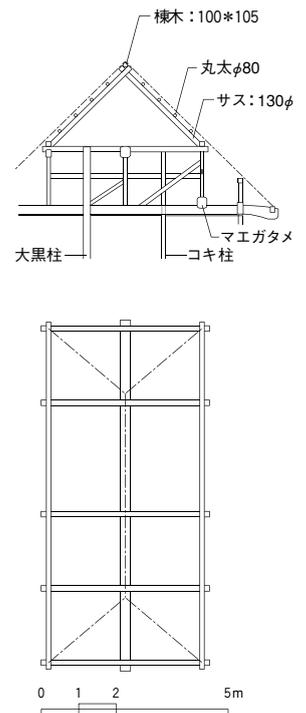


図25 小屋組

#### 4) 桑平 No. 16

当家は桑平集落を通る県道から少し登った神社の上にある。先行研究において、旧一字村内で最も古いとされる民家の近くに位置する。主屋は間口7.5間、奥行3.5間で左勝手横二間取である（図27, 28）。十分な調査はできなかったが、改造は少なく、天井も張られていないため架構の様子がよくわかる（図29）。上屋の梁間は二間半で1間毎に架かる。表側の上屋筋の内法から少し上にマエガタメが架かり上屋を支える。桁行は一間毎に柱を建てるが、梁間は二間半の上屋梁を3等分し五尺毎に柱を建て、コキ柱・オトシコミの構法で架構を固めている。

#### 6. おわりに

つるぎ町一字の民家の先行研究として昭和48年度から実施された徳島県民家緊急調査研究報告「阿波の民家」や（財）四国民家博物館が発行している『四国の民家と集落 一字村』がある。後者は徳島県民家緊急調査に精力的に尽力された宮澤智史氏の執筆で、旧一字村民家の特徴をまとめるとともに村内22棟の民家についての調査報告・解説が詳しくなされている。剣山周辺地域の民家について考える上で非常に参考になるものである。宮澤氏は旧一字村民家を調査する大きな理由のひとつとして「村落共同体が崩壊しつつあり、近い将来いくつかの集落が記録もなくその姿を消してしまうのではないかという危機感を持ったからだ」と書いている。本調査中大横の集落へ行く途中で、崩れかけた廃屋や石垣の屋敷地が杉林の中にひっそりと残っている姿を見て、宮澤氏の言葉が現実となっていることを実感した。一字に限らず県内山間部での過疎化の流れはますます加速していくように思われる。私たち建築に携わる者として、この失われていくであろう民家や集落などの記録を残す責任があるのだと再認識した。

最後になりましたが、本調査に際して快くご協力いただいた、住民の皆様をはじめ関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

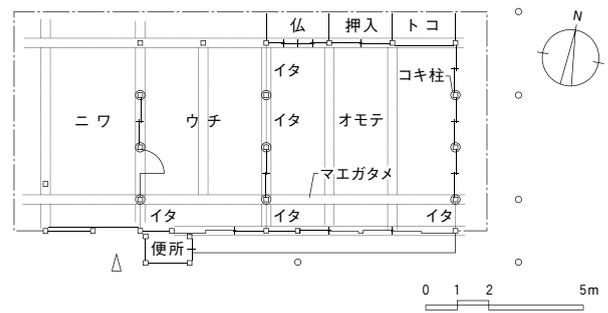


図27 平面図



図28 主屋外観



図29 オモテ内観

#### 文献

- 奈良国立文化研究所・徳島県教育委員会編（1976）：『阿波の民家』。
- 一字村史編纂委員会著（1972）：『一字村史』。
- 宮澤智史著（1977）：『四国の民家と集落 一字村』。
- 阿波学会編（2005）（2007）（2008）：『阿波学会紀要』第51号（木沢）、第53号（東祖谷）、第54号（木屋平）。

Traditional houses of Ichiu area in Tsurugi Cho, Tokushima, Japan.

ISHII Maiko, ODA Marino, KAMAKURA Kazutoshi, KITA Junzou, KUWATA Seiji, SATOU Hiromi, TAKATA Tetsuo, TAKAHAMA Yutaka, TANINAKA Toshihiro, TAMURA Eiji, NASU Yukio, HAYASHI Shigeki, HIMENO Nobuaki, FUKUDA Yorihiro,

Proceedings of Awagakkai, No.57 (2011), pp.99 – 110.